

自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発 (23)

—小学生中・高学年：関わりの促進を重視した療育プログラムの検討—

The care and education program development that support diversity and individual initiatives of children with autism spectrum disorder : Consideration of education program with making much of promotion of relationship

○¹葛西優花・²樋口祐佳・¹山田真由・⁵荒木美知子・⁴松元 佑・³竹内 謙彰・¹荒木 穂積

○KASSAI Yuuka・HIGUCHI Yuuka・YAMADA Mayu・ARAKI Michiko・MATSUMOTO Yuu・TAKEUCHI Yoshiaki・ARAKI Hozumi

(¹立命館大学人間科学研究科・²立命館大学文学研究科・³立命館大学産業社会学部・⁴立命館大学社会学研究科・⁵人間発達研究所)

(¹ Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University / ² Graduate School of Letters, Ritsumeikan University / ³ College of Social Sciences, Ritsumeikan University / ⁴ Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University)

Key words : 関わりの促進, 自閉症スペクトラム児, 療育プログラム

目的

本グループでは、小学生中・高学年の ASD 児を対象に、月 1 回の療育プログラムを実施している。ASD の子どもは社会的文脈に応じて自分の行動を調整することが困難で、他者の感情を察して適切に反応することが苦手であるといわれる。通常、同年齢の仲間との相互関係が限定され、親密な友情関係を築くことが困難である場合がある。2020 年度は、個人行動が多い傾向にある児童、または特定の児童のみとの関わりが多い児童に対して、周囲の児童との関わりを促進させるような療育プログラムの開発を行ってきた。本研究では、11 月～1 月のプログラムの中で、2 名の対象児が周囲の児童とどのように関わるのかを、質的に分析・検討することを目的とする。

方法

本グループに所属している 5 名 (A～E) のうち 11 月～1 月の全プログラムに参加した 2 名 (A, B) を対象とした。これまで、A は特定の他児 (C) との関わりが多い児童、B は個人行動の多い児童だった。月 1 回、120 分の療育プログラムのなかで周囲の児童との関わりを促進させる取り組みとして、3 ヶ月の連続したメインプログラム「お店屋さんごっこ」を実施した。分析対象月は 2020 年 11 月、12 月、2021 年 1 月である。表 1 に、各月のメインプログラムの内容とねらいを示す。

表1 分析対象月のメインプログラムとねらい

月	内容	ねらい
11月	お店をつくらう	計画を立てて遊ぶ
12月	商品を作ろう	友達と協力しながらものづくりをする
1月	お店屋さんごっこをしよう	店員とお客さんの役割を意識して遊ぶ

メインプログラム (40 分) 中の対象児の様子をビデオカメラで記録し、映像記録から対象児の関わり方を質的に分析した。

結果

各月の対象児 (A, B) の関わり方を表 2 に示した。A は以前から特定児童 (C) との恒常的な関わりが多くあ

るため、A と C の関わりは表 2 では省略している。

表2 メインプログラムにおける対象児の関わり方

	11月	12月	1月
A 小3女 発達障害 あり	・ B が自分の店 (ダンボールハウス) を離れて気づいていない内に、自発的に B の店の屋根に余った綿を置いて分ける。	・ B の所に行って、直接材料を買っても良いか聞く。	・ 「こんにちは」「ケーキください」「プリンください」と B の店に向く。 ・ D に商品を持ってきてもらい、笑いながら冗談を言い合う。
B 小4男 発達障害 あり	・ スタッフの仲介でモールを A から貰うことになり、A の方に行ってモールを受け取る。 ・ C に求められてスイーツの玩具や冷蔵庫を玩具を全て出してから渡す。目は合わせない。	・ A から呼びかけられ、A の顔を見る。言葉で「使う」と答える。	・ A に呼びかけられて、注文通りの商品をお皿に乗せて A の方に置く。

※12月はほとんどの時間をものづくりに当てたため、交流は少なめ

※他児の属性…Cは小5女 (発達障害なし)、Dは小4男 (同あり)、Eは小5女 (同あり)

考察

本研究の結果より、対象児 A, B の関わり方に変化が見られた。まず、A では 11 月から B を意識した行動が見られた。12 月、1 月には自発的な B や D への関わりが見られるようになった。次に、B では以前見られなかった他児との関わりが 11 月～1 月にかけて見られるようになった。具体的には、ものを介した関わりや言葉による関わりが見られた。また、グループ全体では 11 月以前は一方のコミュニケーションが多かったが 12 月、1 月には相互のコミュニケーションが増えたため、本プログラムが参加児の他児との双方向の関わりを促進させたと考えられる。これは、お店屋さんという設定の中で、参加児の役割を明確にし、互いに意識することが参加児のコミュニケーションの質に影響を与えたと推察される。以上から、関わりが多くなるような場面を設定し、自然と児童同士が関わるようなプログラム作りが重要であると考えられた。今後は、安心して参加できる環境の中で、児童の関わり方のバリエーションを増やす工夫をしていく。
*本研究は立命館大学人間科学研究科の療育プログラム開発プロジェクトの一環であり、立命館大学の研究倫理の指針に基づいて進められている。研究発表にあたってはプロジェクト参加児の保護者の同意を得ている。